琉球大学学術リポジトリ

ゴールドラッシュ期の女性移民：『1852年から1853年のあるレディーのオーストラリア金鉱地訪問』

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊島, 麗子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002019727

欧米文化論集　第 67 号　抜刷　2023 年 3 月　ISSN 1341-0482

ゴールドラッシュ期の女性移民：
『1852 年から 1853 年のあるレディーのオーストラリア金鉱地訪問』

豊 島　麗 子

〈研 究 ノ ー ト〉

Ryudai Review of Euro-American Studies No.67, 2023

ゴールドラッシュ期の女性移民：
『1852 年から 1853 年のあるレディーのオーストラリア金鉱地訪問』

豊島 麗子

1851 年、オーストラリア植民地はゴールドラッシュに沸き立つ。金鉱の存在は 1823 年にはすでに知られており（Grant 60）、1849 年には植民地政府もそれを把握するが、当時植民地行政官であったフィッツロイ卿は戦争と植民地担当国務長官のグレー卿へ、金は世間を騒がせるだけだとして政府による調査をしないよう進言した。しかしゴールドラッシュのカリフォルニアから戻ったエドワード・ハーグレイヴズが故郷の自然がカリフォルニア州サクラメントに似ていることに気付いて金発掘を始め、オフィア、テューロン、バサーストで金を発見した。こうしてニューサウスウェールズのゴールドラッシュが始まったのである。シドニーやメルボルン、近隣の村々からも多くの人々が金鉱地へ移動し、さらにニュージーランド、ヨーロッパ諸国、東南アジア、中国からも金採掘により財を成そうとする人々がオーストラリアへ渡ってきた。ゴールドラッシュの 1852 年から 1860 年にかけて約 29 万人がイギリスとアイルランドからヴィクトリア州へ渡ってきたという（Lansbury 109 ）。人々は採掘に必要な道具を揃え、採掘許可証を買い、地表を掘り起こしたり、竪坑を掘ったり、選鉱皿や選鉱器で川床や泉の底の砂や砂利を洗ったりして金採掘・採金を行った。オーストラリアのゴールドラッシュは金採掘・採金量が徐々に減少していく中1861年頃まで続いた。

A. ジェイムズ・ハマートンによると、金発見翌年の 1852 年、イギリスからオーストラリアへの移民は前年の 21,532 人から 87,881 人へ約 3 倍に膨れ上がったが、そのほとんどは男性であった。オーストラリア植民地は入植開始から男女数不均衡が大きな問題であったが、ゴールドラッシュ期もそれは続いていた。しかし、階級という観点からはゴールドラッシュは中流階級のオーストラリアへの移民運動を作り出した（111）。1852 年 11 月発行の *The Times* によると、その年の最後の 3 カ月間で少なくとも 7500 人もの有職者がロンドンから金鉱地へ渡ったという（Hammerton 111）。このようにゴールドラッシュ初期のオーストラリアは労働者・貧民・流刑者・元受刑者および軍人などが主体の共同体に中流階級が加わり、階級構造がゆるやかに変化していく

兆しがある。

植民地でも早くから流刑を廃止し中流階級の移民推進を唱える人々はいた。よく言及される人物に、流刑者の両親のもとニューサウスウェールズ植民地で生まれたウィリアム・チャールズ・ウェントワースがいる。ウェントワースは 1819 年「ニューサウスウェールズ植民地ならびにヴァンディーメンズランドにおける移民に関する統計的・歴史的・政治的記述」を刊行し、流刑廃止を訴え、オーストラリアのアルカディア的豊かさを打ち出して、幅広い社会層の移民を引き付けようとした。

先述の書はロバート・サウジーやエドワード・ギボン・ウェイクフィールドなど、様々な人々に広く読まれ、オーストラリアに関する「標準の書」となった（Lansbury 42）。ウェイクフィールドは 1849 年にそれまでの議論をまとめる形で *A View of the Art of Colonization* を刊行し、中流階級、特に女性移民の必要性を強調している（Hammerton 96）。

先に述べたように、ゴールドラッシュ初期にオーストラリアに渡ってきたのも主に男性である。金採掘は力仕事で金鉱地の治安は悪く、日常的に殺人や強盗といった危険にさらされる金鉱地のモラル低下は深刻であった。1852 年、イギリスの風刺画で名高い『パンチ』は第 23 巻 59 ページに、ある採掘者を今まさに刺殺せんとする採掘者を描いた「金鉱地の採掘情景」と題する漫画を載せ、金鉱地の悲惨を描き出している（松村・井野瀬 39-40）。タスマニアや他の流刑地から刑期を終えた囚人が警察官になったり金採掘に参加したりしたことやブッシュレンジャーなどによる金強奪や殺人などの事件は金採掘者の不安や恐怖をあおった。イギリス政府は 1840 年代から中流階級の教養ある女性移民や家族の再会を目的とした家族移民支援制度を設立し、植民地の文化的・道徳的向上を図ろうとしたが、ゴールドラッシュ期のオーストラリアでは勤勉の美徳と道徳性は後退してしまった。

本稿は 22 歳の中流階級イギリス人女性エレン・クレイシーが、ゴールドラッシュが始まった 1952 年から 1953 年にかけてメルボルンや金鉱地で出会った移民の話とオーストラリア植民地での体験を綴った『1852 年から 1853 年のある女性によるオーストラリア金鉱地訪問』（*A Lady's Visit to the Gold Diggins of Australia in 1852 to 1853*）[1] に描かれた、植民地における女性移民を考察する。モラルが退廃したゴールドラッシュ初期の植民地でクレイシーが描いた女性移民はどのような女性たちだったのか、オーストラリア植民地で彼女たちはどのような状況にあり、どのような役割を果たし、植民地建設にどのように貢献したのか。これらの点を精査しながら、1850 年代初期の

[1] *A Lady's Visit to the Gold Diggings in 1852 to 1853* はこれ以後 GD と表記する。

オーストラリア、特に金鉱地における女性移民が表すものを追究する。

I. 初期オーストラリア植民地の歴史と女性移民の役割

1776 年、アメリカ 13 州の独立によって流刑地を失ったイギリス政府は臨時の応急措置として(Brooke and Brandon 102)老朽船をイギリス南部の河川や港湾に浮かべ囚人を収容した。囚人は過密・不潔で命の危険もある老朽船に、数カ月時には数年も拘置された。しかし、その収容には限界があった。

1770 年にキャプテン・クックが発見したオーストラリアは、流刑地アメリカを失ったイギリスにとって極めて魅力的な代替候補地だった。1787 年 5 月 13 日、アーサー・フィリップ提督(在職 1788-92)率いるイギリス海軍艦艇 11 隻編成の第一囚人船団はニューサウスウェールズ植民地[2]に向け出港し、テネリフェ , リオデジャネイロ、ケープタウンに寄港して、翌 1788 年 1 月 18 日から 20 日の間に、シドニーの南約 8 キロに位置するボタニー湾に到着した。内訳は 713 の囚人(男性 558 人、女性 192 人、子ども 13 人)と、高官を含む海軍軍人 197 人とその家族(妻 28 人、子ども 17 人) 242 人の合計 955 人である。航海中に死亡した囚人は 24 人でその内 3 人は子供の囚人であった(Brooke and Brandon 44-45)。1803 年、イギリス政府はさらにヴァン・ディーメンズランド(タスマニア島)を流刑入植地に決める。こうして流刑者はニューサウスウェールズ植民地へ送られ、植民地開拓・建設の労働を担ったのである。

植民地発展の鍵は人口増と労働力増強である。人口増のためには家庭が必要であることは言うまでもない。歴史の始まりから男女数不均衡が顕著だったオーストラリア植民地には、19 世紀初期から植民地共同体発展のために女性移民を増やすべきだとの主張があった。エドワード・ギボン・ウェイクフィールドは『シドニー通信』(1829)でイギリスの人口問題・失業問題の解決と植民地の発展のために若いカップルの選択的移民を推進すべきだと訴えている。若いカップルは植民地の人口増と労働力提供に最も貢献するだけでなく、経済的観点からも子育てのために勤勉に働き資本・土地を増やし植民地の発展に寄与するというのである(Wakefield 84-85)。

社会活動家もイギリス国内の問題と植民地の問題を移民によって解決することを

---

[2] イギリスが領有を宣言した 1770 年にはオーストラリア全土はニューサウスウェールズ植民地と呼ばれており、他の植民地は後に分離して複数の植民地が存在することになった。1786 年 NSW 植民地樹立、1788 年入植開始。1825 年にはタスマニアが 1851 年にはヴィクトリアが分離した。入植開始はタスマニアが 1803 年、ヴィクトリアが 1834 年である。両植民地政府樹立はタスマニア、ヴィクトリアとも 1855 年である。武田いさみ『物語　オーストラリアの歴史　多文化ミドルパワーの実験』中央公論新社、2000 年、p. 3 参照。

提案している。「移民の友」と呼ばれるキャロライン・チザムは「移民と流刑に関する比較的考察」(1847)と題した書簡形式のパンフレットで、イギリスの人口問題・貧困問題とオーストラリア植民地の労働力不足の問題の、移民による解決をグレー卿に訴え、渡航資金のない労働者を政府が補助する移民制度設立を訴えた。重要な点は、チザム夫人が家庭の幸福が植民地発展を支える鍵だとしてイギリスに残った男性移民の妻子の渡航を支援すべきだと主張していることである。奥地で勤勉に働き家族を十分に養う力を得た独身男性の、温かな家庭を求める声(Macjenzie 105)や、十分な資力を蓄えながらも侘しい一人暮らしをしている刑期を終えた男性(MacKenzie 107)に多数出会い、チザムは家族・親戚・友人の重要性をさらに確信する。彼女は家族の再会支援のために精力的に働き、1849 年、「家族入植資金貸付協会」設立にこぎつけ政府支援の家族移住制度が制定された。困窮したイギリスの労働者がオーストラリア植民地で生き生きと働き家族と共に豊かな生活を享受するアルカディアのイメージをチザムは描いていた。

オーストラリア植民地には、しかし、流刑植民地というネガティブなイメージがつきまとった。流刑者の中には無実の者やチーズを盗った程度の軽犯罪者、さらに政治犯や社会活動家も含まれていた。ロレイン・ランズベリーは振興宗教指導者とその信者たち、反政府的な政治的思想・信条を持つ者、社会活動家と食事を共にしただけで流刑になったスコットランドの殉教者がいたと指摘している(16-17)。

このように初期オーストラリア植民地は「汚れた植民地」のレッテルを張られたが、イギリスの司法に異議を唱える人は多く、チャールズ・ディケンズを始め、複数の文学者がイギリスの司法を批判する作品を書いた。イギリスの刑罰システムに汚されてしまったオーストラリア植民地は、健全な空間として蘇るために浄化される必要があった。チザムはその役割を果たす女性のポテンシャルについて述べ、女性移民システム構築を訴えている(20)。[3]

このような状況において、女性移民は二つの役割を期待された。家庭にあっては 19 世紀イギリスの理想の女性像である「家庭の天使」—無私の愛で夫を支え子どもたちを慈しみ、競争社会で戦って疲弊した男性の魂を癒し浄化する—の役割である。独身女性は将来の「家庭の天使」になるべく教育された。さらに植民地の「家庭の天使」は様々な家事労働をも遂行できる精神的・肉体的な強さも求められた。家事をやったことのないようなレディは行くべきではないとクレイシーは警告している(GD 117)。二つ目は植民地のモラルを正す「神の警察」(God's police)の役割である。特に流刑植

[3] Toyoshima, Reiko. "Significance of Female Emigration as Represented in Works by Women."『言語文化研究紀要』17 号(2008) pp. 27-28 に引用。

民地として歴史が始まったオーストラリア植民地では「清く正しい」クリスチャンの女性は、神の正義を実践するために「悪」を排除する重要な役割を期待された。女性移民は程度の差はあれ 19 世紀のイギリス社会の価値観やイデオロギーを体現しながらも、妻・母・労働者という役割のいずれかあるいは全てを果たしながら、植民地で生きる道を模索したのである。

II. 『1852 年から 1853 年のあるレディーのオーストラリア金鉱採掘場訪問』

エレン・クレイシーは作品の冒頭で、オーストラリアに渡った家族や親戚が晒されている危険や貧困をイギリスにいる母親や妻や姉妹に知らせるためにこの冒険譚を書いたと述べている(GD 1)。ヴィクトリア「金採掘」のガイドブックを読んで「ホーマーやユークリッド」を投げ捨てた長兄とともにオーストラリア植民地に渡りメルボルンや奥地で金採掘者や古くからの植民者に会い多くの情報を得たと述べている。この作品に描かれた女性は、従って、金採掘に参加した 22 歳くらいの若い中流階級イギリス人女性が見たオーストラリア女性移民である。夫や家族とともに移民した女性たち、仕事を求めて移民した若い女性、品が悪く自分勝手な女性、裕福な植民者の娘、恋人に裏切られ溺死した女性、移民して両親と祖父に先立たれた孤児の少女、奥地に住む大牧場主の妻など、様々な境遇にある女性たちを描き出している。本稿ではゴールドラッシュ初期のオーストラリア女性移民の多様な経験と状況を考察し、女性移民が表わすものを探っていく。

1．バーメイド

1852 年 4 月のある晴れた日、エレンと兄ウィリアムが乗った移民船「オールド・ファルコン」はケント州北部のグレーヴゼンドから出帆する。横6フィート縦8フィートの窮屈なスペースで夜はキャンプ用の簡易ベッドに寝るという船旅である。約 4 か月後の 1852 年 8 月 24 日、ヴィクトリア植民地ポートフィリップに入港、「ヴィクトリア州の黄金の岸」(GD 5) に上陸する。

到着した港の光景から早くもゴールドラッシュの狂熱と金鉱地の無法ぶりが伝わってくる。港は船でごった返し、なかなか回ってこない水先案内人を待てずに入港しようとした船が 2 隻暗礁に乗り上げている。水夫は船から逃げ出し、時には船長でさえ船を捨てて金鉱地へ向かう。金を掘り当てれば帰りの船は難なく見つけられるのだ。「私たち」はメルボルンへ向かう乗り合い馬車を待つが、馬車の到着を待ちきれずに徒歩でメルボルンを目指す人々もいる。

「私たち」は待合所でイギリス人らしいバーメイドに出会う。初めて会う植民地のイギリス人女性である。収入は明らかではないが植民地で職を得ている事実は重要で

ある。1850 年代のオーストラリア植民地では労働力は非常に高価だったのでバーメイドが経済的自立を果たしている可能性は高い。大工、ブーツや靴職人、仕立屋、車大工、指物師、鍛冶屋、ガラス工など実質的に全ての職業で一日 20 シリングから 30 シリングも稼げた(GD 9)。オーストラリア植民地がイギリスの労働者・貧困者や流刑者により良い生活の機会を与えたのは事実である。

２．外科医夫妻と家事使用人

オーストラリアに到着して最初の採掘一行のメンバーは私、兄、船旅仲間４名の合計 6 名である。宿探しの間に「私たち」は外科医夫妻と家事使用人の女性の存在を知り、交渉の結果、外科医夫妻が留守の間、食事付き一週間 30 シリングで宿泊できることになった。私はもう一人の女性と相部屋でベッドは共有、男性 5 人は小さな一部屋に押し込められるが、屋外でのキャンプに比べるとどれほど幸運かわからない。

外科医夫妻は中流階級である。ヴィクトリア朝イギリスでは家事使用人を少なくとも一人は雇う経済力があることがリスペクタブルな中流階級の記号となる。先に触れたように初期オーストラリア移民は労働者・貧民や流刑者が大半を占めるが、ゴールドラッシュを機に中流階級の移民が増えた(Hammerton 111-12)。

メルボルンに住む外科医夫妻は、ゴールドラッシュ以前に移民した中流階級であろう。妻を伴って移民したのか、植民地で結婚したのか明らかではないが、外科医は船医として移民船に乗り込み、オーストラリア到着後にメルボルンに住むようになったのかもしれない。外科医は中流階級である以外にも植民地共同体に必須の人的資源であり、イギリス政府が推進し植民地政府が求める階級と専門職の人物であった。

この一家にはもう一人移民女性がいる。外科医夫妻一家の家事使用人である。中上流階級の家庭では重要な労働力であり、19 世紀を通し女性移民が最も多く就いた職業である。1850 年代、チザムの尽力で設立された「家族入植資金貸付協会」(Family Colonization Loan Society)は、独身女性の移民も支援していたが、その大半は家事使用人であった(Monk 102)。医師夫妻の自宅を宿泊に提供し食事の手配をするなど、一家の管理も任されていることから、雇用者の信頼が厚いと同時に家政婦としての力量がわかる。19 世紀を通し入植者が切望した「良い召使」である。

３．労働者階級の夫妻／見知らぬ男女

メルボルンの街はよく設計され道路も広いが、街灯はなく多くの道路がまだ舗装されていない。美しい店に陳列された商品を買いにきたメルボルンや近隣の村に住み金鉱で財を成した労働者階級の人々を、クレイシーは見下した描写をしている。

> [I]t is ludicrous to see them in the shops － men who, before the gold-mines were discovered, toiled hard for their daily bread, taking off half-a-dozen thick gold rings from

their fingers, and trying to pull on to their rough, well-hardened hands the best white kids, to be worn at some wedding party; whilst the wife, proud of the novel ornament, descants on the folly of hiding them beneath such useless as gloves.（GD 10）

クレイシーは、労働者階級の人々が富を得て、結婚式で白い手袋をはめるなど、中流階級のように振る舞うことを冷笑している。この描写はクレイシーの階級意識を表すとともに、ゴールドラッシュ以降のオーストラリア植民地における経済力による階級移動を予測させる。

メルボルンには未完成ながら小さな教会が二つあり、円形広場や劇場、パブもある。ロンドンの洗練にはほど遠いが、人々が生活できる施設も設備もある。様々な国から様々な階級の人々が流入し活気に満ちている。しかしゴールドラッシュにより治安は悪くなり、入植者の中には金の亡者になった者も多い。スリが横行し、馬泥棒もいる。傷害や殺人は日常的で植民地政府による秩序維持は困難である。

イギリスの慣習やマナーも植民地の状況に合わせてすたれたり変化したりする。クレイシーは、ある男性が泥で靴が汚れるのを嫌がって、連れの女性にぬかるみを歩かせ手紙を投函させる場面を「植民地の作法」(GD 12)と呼んでいる。また時々通りで遭遇する結婚式の一行を「金採掘者の結婚」(GD 12)の乱痴気騒ぎと表現している。花婿は瓶から直にシャンパンを飲み、花嫁のヴェール、白いキッド革製の手袋、オレンジの花冠は価格にかかわらず植民地では入手が困難である。花婿も花嫁も労働者階級の移民であろうが、ここにもクレイシーの階級意識が表れている。

４．厳格な父親と娘

スーザン・ヒルトンの父、老ヒルトンは厳格な懲戒主義者であり「急進主義、革命論者、政治・社会改革者、あるいは国教会や国家に対するいかなる反論・反対者をも憎んだ」(GD 29)。つまりあらゆる変革を忌諱する超保守主義者である。この封建的な父親の娘、スーザンは、父親の命令には絶対服従の中流階級の女性であり、「家庭の天使」になるべく育てられたことがわかる。

そのスーザンをマイクとロバートという採掘仲間の二人が好きになり、マイクがスーザンの心をつかむ。しかしマイクは老ヘンリーとは真逆の性格で、権力への反抗が何より好きであり、最大の自慢は採掘ライセンス料を政府に「くすねさせた」ことがないことである(GD 29)。法を守らない者に娘との結婚は許さないという父親の宣言を聞いたスーザンは、結婚を前に金鉱地に赴くマイクに涙ながらに別れを告げる。マイクは最初の月はライセンスを買うが、案の定翌月のライセンス更新を怠る。その結果ライセンス不所持で採掘していることが発覚しそうになるが、検査官に嘘をついてまんまと逃げる。もともと金採掘には熱心で今回も質のよい小さな金塊をいくつも発見し、エスコートオフィスに預けた後の出来事である。マイクは金鉱地から戻って３

日後にスーザンと結婚する。クレイシーは二人のコートシップ期間と結婚を取り上げ、植民地では全てが鉄道のようなスピードで進むと揶揄している。

> Although railroads are as yet unknown in Australia, everything goes on at railroad speed: and a marriage concocted one day is frequently solemnized the next. His eagerness, therefore, was no way remarkable. No time was lost.（GD 31）

クレイシーの描写にはオーストラリア植民地では人間も制度も未熟で雑であるというネガティブなニュアンスが感じ取れる。身分も収入も安定しない若い独身男性の採掘者にとって、植民者の家庭で父親の庇護のもと育った女性は理想の結婚相手であろうし、植民地の男女数不均衡を考慮すると結婚を急ぐのは自然である。現に採掘仲間のロバートはスーザンへの恋心をフレンドリーな態度で隠し続け、マイクに不都合なことが起こればスーザンと結婚しようと策を練っていると、クレイシー自身が語っている。

５．女性の影響力について

「家庭の天使」は道徳的に正しく、巫女のように競争社会で汚れた魂を浄める力があるとされている。金鉱地の侘しいテント生活でも、女性はそのソフトな影響力で温かい雰囲気を作り出す。採掘者のテントでは、家具といえば木のブロックに置かれたテーブル代わりの箱だけで、寝具類は地面に直接敷く。朝食、昼食、夕食の三食とも同じ錫の食器を使い、料理は羊肉、ダンパー（イーストを入れないパン）、紅茶といった単調なものである。しかし女性がいるテントには家庭的な温かさがある。ベッドにはシーツや毛布がかけられ、地面にはカーペットが敷かれていたりする。ペットを飼うこともある。金鉱地へ来る採掘者は、最初は妻を厄介だと思う。女性は怖がったり機嫌が悪くなったり夫と口論をすることもあるからというのが理由だが、最終的には金鉱地の殺伐とした生活を穏やかなものにしてくれると知る（GD38）。

クレイシーの記述は簡単なものだが、女性が作り出す優しく温かい空間は金鉱地の男性に家庭の幸福を思い出させる。移民を推進する社会活動家、チザムも注目した点である。先に述べたように彼女は精神的幸福をもたらす家庭を重視し、家族再会のための移民制度制定を政府に働きかけ、1849 年に「家族入植資金貸付協会」設立を実現させた。

６．酒屋の女性

兄と私はメルボルンに数日滞在した後、ホテルに泊まったりキャンプをしたりしながらフォレスト・クリークからブラック・フォレストを経てイーグル・ホークにやってくる。フォレスト・クリークでは何千人もの採掘者が様々な作業をしているの

を目にする。途中通過したブラック・フォレストは武装したブッシュレンジャーが金鉱地に向かう人々を襲ったりする最も危険な場所である。採掘パーティーメンバーは目的地や安全を考慮して入れ替わっていくが、イーグル・ホークでは兄を含む 5 人の男性と私の 6 名でパーティーを組んだ。採掘地に到着すると 4 人の船旅仲間が近くにキャンプを張っていた。彼らの背景は様々である。大牧場を経営できるほど裕福な者、自由貿易を嫌うジェントルマン・ファーマー、メルボルンで職を見つけられなかった建築家、オーストラリアで歌手の夢をかなえるために妻と大家族をイギリスに残してやってきた元家屋塗装工など、経済的背景やイギリスでの階級は様々である。ゴールドラッシュが裕福な中流階級や上流階級の移民をも後押しするきっかけになったことがわかる。

イーグル・ホークについた晩、「私たち」は一晩中眠れないほどある女性の声に悩まされる。男性たちが「愛すべき女性」(“the amiable woman”)と命名したその女性の堕落ぶりをクレイシーは次のように描く。

夫が金採掘に出かけて留守の間、違法に酒を売ったり飲んだり煙草を吸ったりする女性は汚れたけばけばしい色のドレスをだらりと着て、ブラッシングしたり櫛ですいたりしたこともないようなぼさぼさの黒髪は酒焼の顔にかかっている。男性のような大声でおよそこれまで人が口にしたことのないような悪態をつく(GD43)。夜はさらに修羅場である。夫が金を見つけられなかったり、酒屋の収入が少なかったりすると大声で怒鳴る。

私たちはさっさとテントを移動したが、同じようにかの「愛すべき女性」に我慢できずに移動してきた一行が言うには、その女性は医師二人と口論が絶えず、医師が偽の診断書発行を断わると診察の妨害をすると脅し、実際やろうと思えば誰かに妨害を頼めるほど顔がきくという。

この女性は下品で性悪である。クレイシーはこの女性を元受刑者か元娼婦であると暗示しているのだろうか。この女性には夫がいるが、オーストラリア植民地では男性移民が元受刑者や元娼婦と結婚することはあったし、元受刑者同士の結婚もあった。藤川は植民地政府が、職に就けず「女性工場」[4]に収容された女性流刑者と男性移民を結婚させる政策を経費節減のためにとったと述べている(77)。

7. 破産した男性の妻

ウォルター氏は会社の共同経営で破産してしまった。オーストラリアで成功の機会が誰にでもあることや鉱物資源が豊富であることはヨーロッパで広く知られていた

[4] 「余剰の女性労働者、社会規範の逸脱者、病人」などを収容した施設(藤川 77)。

ので、ウォルター氏は友人の助言を受け入れ、残ったお金を渡航費に充ててオーストラリア植民地にやって来た。一方妻ハリエットは年老いた独身の伯母をみるためにイギリスに留まることになった。伯母が急死したため身辺整理をして葬式を出すと数ポンドしか残らなかった。夫の元へ行きたいという思いからハリエットは、移民船で病人や子どもの世話をする代わりに渡航費を出してくれる雇用者を求める広告を出し、すぐに仕事を見つける。こうして彼女はヴィクトリア植民地のポートフィリップに着くが、夫より３週間も早い到着であった。所持金はほとんどなく、仕事を見つけるため、また付き添いのない女性が受ける侮辱や面倒を避けるために男性に変装し、埠頭近くで軽い仕事を得る。1 週間に 1 ポンドを稼ぎ、夜は今にも倒れそうな倉庫で寝かせてもらった。

ハリエットは上記のようにその「若く美しい」女性のイメージからは想像できないほど逞しい女性で、オーストラリア植民地が求める移民女性像に近い。つまり「気難しいレディ」ではなく、家事を任されても労働力となる女性である。その賢さと問題解決力、環境への適応力は、夫の破産からオーストラリアの金鉱地でともに生活するまでの経緯から明らかである。苦境にあっても自力で道を切り開き、肉体労働に従事してでも生き延びる強さをもった、オーストラリア移民に相応しい女性である。

８．孤児の少女

「私たち」の一行はイーグル・ホーク谷でも満足できる程度の金を掘り当てた後、新しい採掘地へ移ることにする。夕方アイアンバーク谷に着き、翌朝にはさらにフォレスト・クリークを目指す。谷を進んでいくと見捨てられた縦穴がたくさんあった。別の場所では男性採掘者に交じり数人の女性が採掘作業をしており、乳児を抱いている母親もいる。金鉱地における家族の姿は、ゴールドラッシュが階級的・民族的背景の異なる人々を家族単位でオーストラリアに引き付けたことを示している。

アイアンバークのテント街のはずれに、大きな毛布をロープにかけて両端を木に括り付け、木の杭で両端を地面に固定しただけのテントがあった。そこには 10 歳くらいの少女ジェシーと病気の祖父が暮らしており、少女は老人の世話をしながら、緑色の薄織の布で「ディガーズ・ヴェール」や蝋燭を作り売って生活している。ジェシーの両親と祖父は去年の夏オーストラリアに渡ってきた。父親は採掘作業中に酷い事故に遭いメルボルンへ戻るが、採掘地へ戻ってくるとすぐに亡くなり、母親もまもなく後を追った。友人も親戚もいない植民地で少女は年老いた祖父と二人取り残されたのである。祖父は金発掘に夢中になり「わしらは金持ちになるんだ。ジェシーはわしが死ぬ前に美しいレディーになるんだよ」(GD65) と言い続けた。すでに食べ物も十分になかったのだが。

金鉱地では金を求めて「死ぬまで掘り続ける」(GD 65) 人々がいる。ジェシーの祖父

もその一人になった。

祖父の死後、フランクはジェシーの祖父の葬式を街の肉屋に頼み、一行はジェシーを連れてフォレスト・クリークへ向かう。

ジェシーの家族は豊かな生活を求めて金採掘に賭けた移民家族が直面する現実を提示している。金持ちになる夢にとりつかれ極貧のなかでも死ぬまで掘り続ける人々を生み出すゴールドラッシュは、金鉱の存在を公にしたくなかった植民地政府が危惧したように金が引き起こす惨状を照らし出している。

９．奥地の女性

オクタヴィアスは 8 年前 25 歳でオーストラリアに移民した伯父に偶然再会する。伯父はアデレイドに到着してから数カ月の間、物見遊山で所持金 200 ポンドを使い果たした後、紹介状の束を焼き捨て、食糧配給付き週 15 シリングで大牧場での仕事を得る。200 マイルも奥地に入って牧場主の家に到着すると、そこには顔色の悪い小柄な妻がおり、夫が私を連れて戻ったのを喜んだ。近隣に住む大勢の先住民に脅威を感じてきたからである。大牧場には彼女以外、若者が一人と羊飼いの老夫婦しかいなかった。大牧場に到着後 6 週間もたたないうちに彼女は新生児と共に亡くなった。何マイル四方にも医者はおらず、老羊飼いの妻は全く役に立たなかった。

オクタヴィアスの伯父はオーストラリア奥地の生活の厳しさを知っている。「奥地は女性がいるところではない」。“I believe this often happens in the bush−it’s not a place for woman−folks”（GD 76）. 医師の助けは得られず家事はもちろんのこと時には肉体労働に耐えられるだけの強い体と適応力のある女性でないと奥地で生きていくのは難しい。ルーシー・フロストは奥地には神経が細やかなレディー（a nervous lady）の居場所はないと表現した。オクタヴィアスの伯父は出産も命がけの奥地は「女性」が住むところではないと言う。

チザムは奥地に住んでいる温かい家庭を求める独身男性を例に出して女性移民を後押しした。女性たちは奥地で家庭をつくり幸せに暮らせただろうか。

１０．「堕ちた女たち」

「堕ちた女たち」つまり娼婦は 19 世紀イギリスではロンドンを中心に多数存在した。ただしその定義は曖昧で恣意的であり、実数把握は難しい（荻野 166-68）。この作品でも若く美しいメアリーが「堕ちた女」の運命を辿ることになる。

1851 年 8 月、メアリーは移民船でハドソン湾に到着するが、船旅中にヘンリー・スティーヴンとすでに結婚の約束をしていた。メアリーはリスペクタブルな家庭に仕事が決まり、ヘンリーは警察に入ることになっていたが、二人とも短期間で仕事を辞める。

メアリーは二度ヘンリーに捨てられる。一度目はクリスマスの結婚式の数日前、一夜を共に過ごした後ヘンリーは金鉱地バララットへ向かう。二度目はメアリーの弟から大金を借りて再度計画した結婚式に現れず金鉱地へ行ってしまう。最初の関係でメアリーは妊娠し、激怒した弟はヘンリーを見つけ出すためにメアリーの元を去る。弟のいない間にメアリーは出産し、赤子はメアリーに慰めをもたらすが、だんだんやせ細りとうとう死んでしまう。亡骸を抱いたメアリーはヘンリーと弟を追って金鉱地ジーロングに向かい歩いていくが、嵐で増水した川で溺死してしまう。復讐心に燃えた弟はヘンリーを見つけ出すが二人とも溺死する。

メアリーは 19 世紀イギリス小説に登場する「誘惑されて捨てられて」「堕ちた女」となった女性と重なる。ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』(1849-1850)では無垢なエミリーが若い上流階級の男性スティアフォースに捨てられ、父親代わりのペゴティとオーストラリアに向かう移民船に乗る。もう一人の「堕ちた女」マーサはオーストラリアの奥地で幸せに暮らしていると結末で語られる。この筋書きはディケンズの慈善活動と符合する点がある。彼は 23 歳の女性資産家アンジェラ・バーデット・クーツからロンドンの娼婦救済の相談と支援を受け、1847 年ロンドンに娼婦の更生施設「ユレニアコテージ」を設立・運営したが、入所の条件は更生後オーストラリアへ移民することだった。

オーストラリアはイギリス社会の犠牲者や脱落者の再出発に最も適した植民地だという。しかしメアリーのエピソードはオーストラリア植民地で若い独身女性が晒されている危険を描き出している。ジェンダーのダブルスタンダードが女性に社会的死をもたらすことはイギリスでもオーストラリア植民地でも変わりない。

１１．成功した女性移民

様々な背景の女性移民のなかで、クレイシーが成功した移民と感嘆するグループはチザムの庇護のもとオーストラリアに来た若い女性やマトロンたちである。マトロンは船旅の間中、若い女性移民の世話や教育係を務めるが、自力で道を切り開く逞しさを持ったしっかり者ばかりである。若い女性移民も同様だとクレイシーは述べている。クレイシーはその理由として彼女が送り出す女性移民が勤勉で倹約家のスコットランド人であるからだと推測している。

１２．ガヴァネス

ガヴァネスは 19 世紀の教養ある中流階級の女性が体面を保ちつつ就くことのできた唯一の職業である。新婚旅行でイギリスに行く私が買い物で忙しくしていた時、少女時代の 3 年間を過ごした「花嫁学校」のガヴァネス、ジュリアと通りで出会う。ガヴァネスは多くの難儀な仕事を消化しなければならなかったが、ジュリアは持ち前の

賢さとユーモアで生徒の尊敬を集めていた。

ジュリアがオーストラリアに来たのは母親の年老いた独身の従弟の面倒を見るためであった。そのお礼に従妹は母親と娘に多額の遺産を約束した。母娘は喜んでシドニーに向かったが、従兄が関わっていた事業が失敗し、彼はショックで手紙を投函した 5 か月後に亡くなったことがわかった。

ジュリアは病弱な母親を支えながら友人もいない見知らぬ土地で生活していく道を探る。小さな子供のガヴァネス、病人の世話、主人が留守中の家政婦の募集広告を新聞で見るとすぐに手紙を書き、受け入れられる。子ども達の父親はジュリアの優しい性格やガヴァネスとしての良い性質を知り、ジュリアと結婚する。ジュリアは幸せそのものであった。

ジュリアの移民は波乱に満ちたものであるが、最後は幸せになる。これはジュリアの優しさやユーモアだけでなく、決断力と行動力が引き寄せた幸運である。病気の母親を支える決意は二人しかいない家族なら当然であろう。注目すべきは花嫁学校での教育経験が培った能力である。その能力・力量は母を失った子供たちだけに役立つものではなく、後にマライア・ライが熱心に推進する教養ある中流階級女性移民の存在意義に繋がっていく。植民地のモラルを上げる役割である（*English Woman's Journal* 168）。

本作品はオーストラリア植民地で金採掘を続けながら徒歩や馬車で移動する一行のなかで唯一の女性である「私」の視点を通して、メルボルンや金鉱地および移動経路で遭遇した人々や出来事が描かれている。本作品に描かれた女性移民の考察から、1850 年代初期ゴールドラッシュの様々な女性移民の背景と経験が把握できる。女性たちは「家庭の天使」や「神の警察」の役割を期待されるが、オーストラリア植民地の女性の現実は過酷であり、精神的・肉体的な強さも極めて重要である。次は女性移民の考察対象を広げて考察を深めながらゴールドラッシュ期の女性移民の多様で複雑な経験・意識・表象を探っていく。

引用文献

Booke, Alan, David Brandon. *Bound for Botany Bay: British Convict Voyages to Australia*. The National Archives, 2005.

Chisholm, Caroline. *Emigration and Transportation Relatively Considered*. 1847.

English Woman's Journal 8（1861）pp. 165-71.

Frost, Lucy. *No Place for a Nervous Lady: Voices from the Australian Bush*.

Mcphee Briggle/Penguin Books, 1984.
Monk, Una. *New Horizons: A Hundred Years of Women's Migration*. Her Majesty's Stationary Office, 1963.
Grant, Robert D. *Representations of Emigration, Colonisation and Settlement: Imagining Empire, 1800-1860*. Palgrave Macmillan, 2005.
Hammerton, A. James. *Emigrant Gentlewomen. Genteel Poverty and Female Emigration, 1830-1914*. Groom Helm Ltd., 1979.
Lansbury, Coral. *Arcady in Australia: The Evocation of Australia in Nineteenth-Century English Literature*. Melbourne UP, 1970.
Mackenzie, Eneas. *Memoirs of Mrs. Caroline Chisholm*. 1852. Classic Reprint Series, Forgotten Books, FB &c Ltd. 2018.
Toyoshima, Reiko. "Significance of Female Emigration as Represented in Works by Women."『言語文化研究紀要』17 号（2008）pp.23-44.
Wakefield, Edward Gibbon. *A Letter from Sydney*. London, 1829.
Wentworth, William Charles. *A Statistical, Historical and Political Description of the Colony of New South Wales*. 1819.
荻野美穂「八章『堕ちた女たち』―虚構と実像」松村昌家他編『英国文化の世紀４　民衆の文化史』研究社出版、1997 年。
藤川孝男編『オーストラリアの歴史：多文化社会の歴史の可能性を探る』有斐閣アルマ、2004 年。
松村昌家・井野瀬久美恵『祖国イギリスを離れて―ヴィクトリア時代の移民―』本の友社、1997 年。
武田いさみ『物語　オーストラリアの歴史　多文化ミドルパワーの実験』中央公論新社、2000 年。

Female Emigrants in the Time of Gold Rush:

A Lady's Visit to the Gold Diggins of Australia in 1852 to 1853

Reiko Toyoshima

This paper examines female emigrants in Australia, represented in the book by a woman who visited to the gold diggings for the first two years of gold rush there. In Australia, female emigrants were expected to play the roles of angel in the house and God's police to moralize and elevate people as individuals and colonial societies overall. The gold rush, however, have a detrimental effect on general social morality. This paper examines the varieties of female emigrants and the complexities of their experience in order to discover the ways in which they constructed their live and themselves.